

多くの人は、成功したら「自分の能力や努力のおかげ」と考え、失敗したときは「運が悪かった」「環境が悪かった」と考えがちだそうです。これは「自己奉仕バイアス」と呼ばれ、自分のプライドや自尊心を保つための無意識の心の防衛機制ともいえます。いわゆる負け惜しみも、人間らしい心のバリアみたいなものですね。

カープ低迷



爽涼の秋となり、朝夕はしのぎやすくなってまいりましたが、昼間はまだまだむし暑く、いまだに汗ばむ陽気が続いております。

長引く夏にうんざりするのもあと少し、秋の味覚、秋の夜長、秋の行楽を楽しみましょう！

さて、我らがカープ。

かつてのカープには、球団史に燦然と輝く「赤ヘル軍団」としてセリーグを席卷した、忘れられない時代があった。1975年の初優勝を皮切りに、古葉監督が率いた1970年代後半から80年代にかけて、チームは5度のリーグ優勝と3度の日本一を達成し、一つの黄金時代を築き上げた。この時代のカープの強さの根源は、走攻守のすべてにおいて高いレベルにあったことに尽きる。緻密なデータと大胆な戦略に基づいた「足でかき回す野球」は、カープの代名詞となり、多くのファンを熱狂の渦に巻き込んだ。投手陣も安定しており、まさに投打の歯車が完璧に噛み合った状態だった。

その後、1980年代後半から90年代にかけて、強力な投手陣を最大の武器とし、幾度となくペナントレースの主演となった。この時代の象徴と言えるのが、盤石の先発ローテーションだ。彼らが安定して試合を作ること、僅差のゲームを確実にものにするのがカープの勝ちパターンだった。現在の投手陣も個々の能力は決して低くないが、この時代の投手たちが見せた、試合を完全に支配するほどの圧倒的な存在感と比較され、物足りなさを指摘されることも少なくない。

近年、カープの大きな課題としてファンの間で半ば常識となっているのが、特定の期間における極端な失速だ。今シーズンも残念ながら例外ではなく、7月には3勝14敗3分と大きく負け越した。これは単なる一時的な不調ではなく、チームの総合力や選手層の薄さといった構造的な課題を示唆している。パリーグの強力な投手陣や打線に対応しきれず、自信を喪失したままリーグ戦に戻ってしまうパターンが繰り返されている。シーズンを通して安定したパフォーマンスを維持できないこの危うさが、「カープは結局弱い」という根強い印象を与えてしまう最大の要因といえる。

チームの課題を象徴するのが、得点圏打率の低さだ。ランナーを二塁や三塁の進めても、あと一本が出ずに無得点に終わるイニングが非常に多い。これは個々の選手の技術的な問題というよりも、「自分が決めなければ」というプレッシャーからくる精神的な要因が大きいと考えられる。

また、夏の厳しい暑さがピークに達する時期に、チームのパフォーマンスが急激に低下するという課題が、何ら解決されないまま持ち越されている。同じ失敗を何度も繰り返しているという事実は、チームが構造的な問題を抱えていることを強く示唆しており、小手先の修正だけではこの長期的な低迷から抜け出すことは難しい。



頑張れカープ！！

エルフォルクはあなたを そしてカープを 全力応援致します！

裏面もご覧ください。